

「朝だ 朝だよ 朝日がのぼる」

西川武彦

標題は、第二次大戦の頃に小学生だった方なら誰でも知っている国民歌謡です。「…空にまっ赤な日がのぼる、みんな元気で 元気で起きよ」と、続きます。筆者は、毎朝七時前、二階にある書斎のデスクに陣取り、ネットでニュースを漁ったり、メールを処理しながら、はるか東方から住宅街を越えて朝日がのぼるのを眺めるのが、楽しい日課の一つになっています。晴天なら、空は秒ごとに薄いオレンジ色から赤みを増して、音もなく、燃えるように上り、七時には円い全貌が現われます。そして、このタイミングで毎日のように思い浮かぶのが標題の歌なのです。

今日の大事な仕事は、歩いて十分足らずの区役所のシモキタ出張所に出向き、生命保険の更新に必要な「現況届け」を頂戴してくる事です。例年、この時期になると、保険会社から提出を求められます。「まだ生きていますか？」という問い合わせでしょう。

区役所から届いた案内には、身分を証明する何かがあれば印鑑は要らないとのこと。行政改革が少しは進んだ証かもしれません。仕事が終わると、そこを起点に、小田急線と京王線の最寄り駅を三角状に結ぶ自分なりのコースを、よろよろ歩き廻ります。コースは何種類か用意してあり、その日の気分とか天気具合で選びます。コロナのせいか、人通りは少なく、気が引けるほどです。一日五千歩を目途にしていますが、その達成は楽ではありません。

家に戻ると、今年の我が身の対処方針である書斎の整理・片付けに挑戦…、と云えば格好いいですが、言動が頼りなくなってきたのを知って、老妻から課された今年の命題なのです。…とはいえ、「八十路入り まだ満たされず 満を持す」と、川柳で詠むご隠居です。手に取る一つ一つに思い出がこもっていて、ままなりません。結局は、重ね直したり、置き換えたりするだけで終わってしまうから情けない。今や旅に出なくなって退屈そうにしている大中小の鞆に、種分けした書類をぎっしり詰める始末です。場所を変えただけなのです。そうした毎日が繰り返される。

明朝も前出の国民歌謡を口ずさんで始まる同じような一日が待ち受けていそうです。「あーあ やんなっちゃった あーあ 驚いた」。牧伸二さんの歌声が、ウクレレを伴奏に頭を巡ります。